

道徳

対話や語り合いをとおして、多面的・多角的に考え、深い学びにいたる授業づくり

「深い学び」の鍵になるのは「見方・考え方」です。これは道徳の目標に示された学習活動「様々な事象を、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方を考えること」のことです。

「見方・考え方」を働かせ、「対話」、「語り合い」、「自分事（自我関与）」、「多面的・多角的」をキーワードに「深い学び」にいたる授業づくりを進めます。



県中教研 道徳部 全県部長
新潟市立白南中学校

校長 和泉 哲章

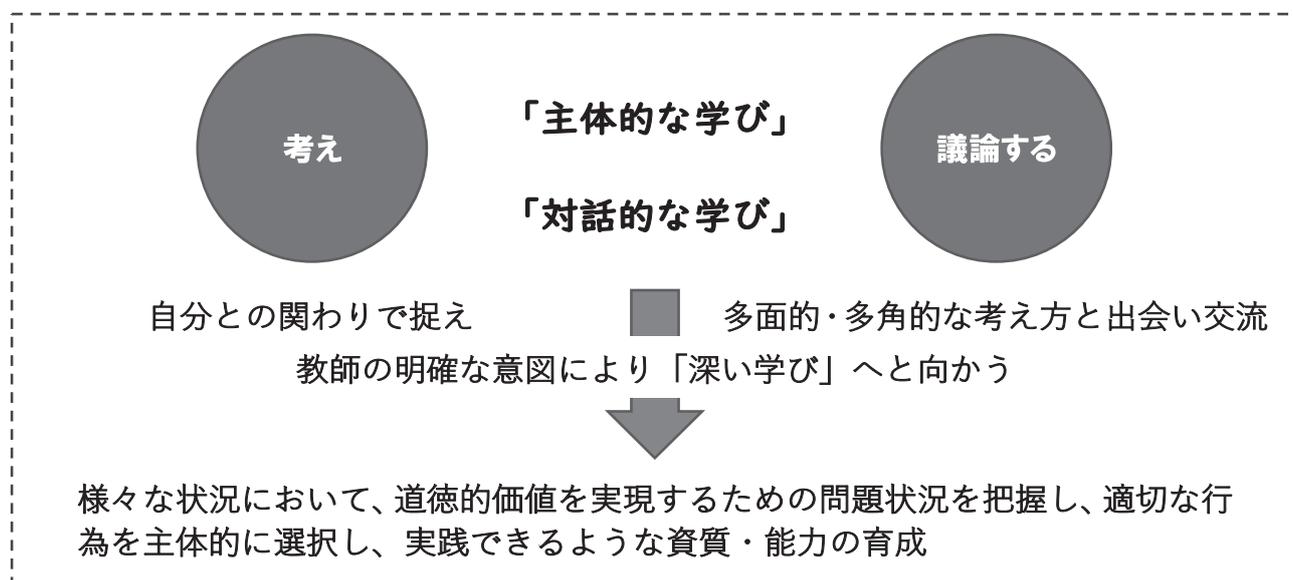
「主体的な学び」と「対話的な学び」をとおして「深い学び」へ

これまでの道徳授業では、主題の設定やねらいが不十分な単なる生活体験の話し合いの指導や読み物教材の登場人物の心情を理解するのみで終始する指導、望ましいと分かっていることを言わせたり書かせたりすることに終始する指導がみられ、道徳授業の課題でした。

深い学びの鍵である「見方・考え方」を深めるために「主体的な学び」と「対話的な学

び」が両輪になります。「主体的な学び」では自分自身が問題意識をもち、自分自身との関わりで考えさせる工夫が必要です。また「対話的な学び」では、協働し対話させたり、多面的・多角的に考えさせたりする工夫が必要です。

このことから「対話」、「語り合い」、「自分事（自我関与）」、「多面的・多角的」といった言葉を授業改善のキーワードとして「深い学び」にいたる授業を構想していきます。



「見方・考え方」を働かせ、深い学びにいたる授業の工夫

「見方・考え方」を働かせ、深い学びにいたる授業づくりで押さえておきたいことがあります。

まず、「道徳的諸価値の理解を基に～」ということです。道徳的諸価値の理解では次の3つの理解を押さえておくことが肝要です。

- 人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること（価値理解）
- 道徳的価値は大切であってもなかなか実現できない人間の弱さなども理解すること（人間理解）
- 道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方や考え方は一つではなく多様であることを理解すること（他者理解）

次に「自分を見つめる」ということです。

キーワード：「自分事（自我関与）」

- 生徒の日常生活での経験や学校での共通体験を想起できる工夫を行うこと。
- 読み物教材等の登場人物に共感する事だけでなく、自分の体験から表現できるような

発問を工夫すること。

次に「多面的・多角的に考える」ことです。

キーワード：「対話」「語り合い」「多面的・多角的」

- 「対話」や「語り合い」を促すため、ペアや小集団などの学習形態を設定したり、ICTを活用し思考を可視化したりするなど工夫すること。
- 複数で話し合っただけでは「多面的・多角的」に考えたとは言えない。異なる立場や見方・考え方から考えられるよう工夫すること。
- 教師だけでなく保護者、地域住民、専門家等の参加を得て対話を促すよう工夫すること。

「多面的・多角的」に考えさせ、深い学びにいたるため、教師は生徒の話し合いを見取り、必要に応じて生徒が気づかないような新しい視点を投入して、議論を深めるよう工夫します。

「深い学びの技法20」と指導の手立ての工夫

本研究では、「深い学びの技法」を授業の中心的な手立てとして講じます。前述した様々な工夫も「深い学びの技法」を活用して授業を構想しています。

各地区で最も取り入れられる深い学びの技法は⑧「異なる多様な考えを比較してみる」です。⑦「視点の転換や逆思考をして考える。」と合わせて、多面的・多角的な思考を促す手立てです。また、①「学んだ知識を活用して

課題や目標を設定する」は、自分の問題意識をもたせることであり、⑬「学習成果と自己との関わりを振り返る」、⑮「自分の言葉で学んだことを整理しまとめる」と合わせて、自分事として考えさせる手立てです。そして、⑩「仲間と練り合いや練り上げをする」は、他者と多面的多角的な視点から検討することをおして、より深い学びを目指す手立てになります。

道徳 重点方針

- 1 校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、各校の実態を考慮して、重点目標を設定するなどして、道徳教育の全体計画及び年間指導計画を作成する。
- 2 自分事としての課題になるように、道徳的諸価値の理解を基にして、生徒の考えやこれまでの生き方を確認させるなどの働きかけを工夫する。
- 3 考え、議論させるために、多面的・多角的な視点からの重層的な発問や体験的な学習などを取り入れ、「自分を語る」授業を展開する。
 - ア 登場人物への自我関与中心の学習
 - イ 生きる上で出会う課題に対する問題解決的な学習
 - ウ 道徳的行為に関する体験的な学習

道徳 <上越地区／妙高市中教研>

11月22日(金) 研究会開催

研究主題：語り合いを通して、よりよい生き方を求める
生徒の育成

題 材 名：「1年：もったいない」
「2年：夜の果物屋」
「3年：家族の思いと意思表示カード」

会 場 校：妙高市立新井中学校

公 開：3学級

授 業 者：北島 大樹・山口 達也・岩片 仁美

指 導 者：上越市立板倉小学校 校長 廣井 弘敏 様
妙高市教育委員会 副参事 小出 信也 様
上越市立八千浦中学校 教頭 平野 彰子 様



研究推進責任者
妙高市立新井中学校
丸山 徹也



教科・領域担当者
妙高市立新井中学校
堀田 加奈子

こんな深い学びの姿を目指します

「深い学びの姿」を「語り合いを通して、よりよい生き方を求める姿」としました。自身の体験などから自分の思いを語り、また仲間の語りを聞くことで、道徳的な価値観の強化や修正を期待します。さらに、迷いや葛藤の中から自分事としてとらえることで本当の問いが生まれ、自分の生き方について深く考えることができるのではないかと考えます。「語り合い」を充実させ、物事を広い視野から「多面的・多角的」に考え、生き方についての考えを深める授業を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.7)

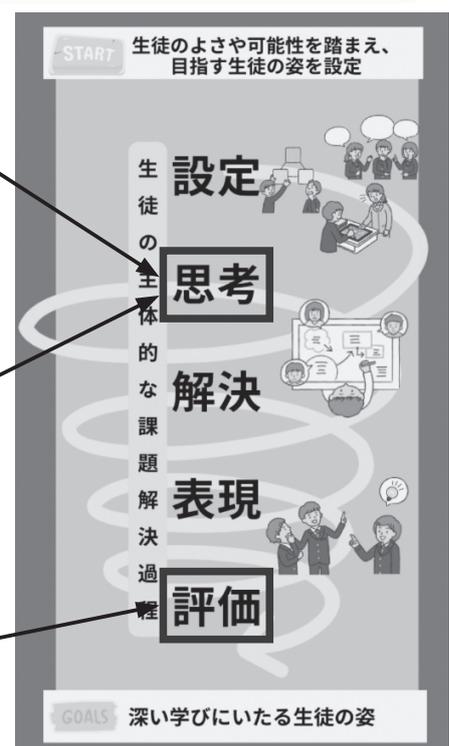
共感的発問、自己置換的発問や自由な思考を促す発問など、思考を促す問いを設定する。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.8)

深い学びに至るための語り合いになるよう話し合いのためのツール(ホワイトボードやICTなど)を活用する。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.19)

自分の思考と向き合うための振り返りの場面を十分確保する。



単元(題材)の様子

共感的発問、自己置換的発問や切り返しの発問を意図的に行うことで、生徒に自分事として考えさせることができ、問題意識を喚起します。

これにより、根拠をもとに交流することで、多面的・多角的な思考を促し、深い学びにつなげます。

ポイント1

【共感的発問の例】

「～はどんなことを考えていたか」

【自己置換的発問の例】

「自分が～だったらどう考えるか」

【切り返しの発問の例】

「もう少し教えてください」

「補足してくれる人はいませんか」

協働的に書く場面を設定することで多様な考えを交流することができます。例えば、充実した語り合いのためにホワイトボードや情報共有アプリを使用し、それぞれの考えを可視化し、「多面的・多角的」に捉えさせます。授業者がそれらについて、「どうのことですか」「もう少し話し合ってください」と問い返すことで、さらに議論が深まり、語り合いにつながります。

ポイント2



語り合いを通して、どんな気づきがあったのか、どのように考えを深める事ができたのかなど、授業のねらいに直結することを終末時に書く、「振り返り」の時間を十分に確保します。

このような自己内対話が、学びを深め、新たな見方、考え方への気づきを促し、道徳的実践力を高める契機となることを期待しています。

ポイント3



研究会

新井中学校では、毎回授業者が変わるローテーション道徳に取り組んでいます。授業者が相互に学び合い、授業力の向上を図ってきました。研究会では、各学年合計3学級の授業を公開します。語り合いを充実させる、対話方法などを工夫し、物事を広い視野から「多面的・多角的」に考え、生き方についての考えを深める授業を目指します。



道徳 <中越地区／見附市中教研>

11月20日(水) 研究会開催

研究主題：多面的・多角的に自己の考えを練り上げる
生徒の育成を目指して

題材名：「3年：サルも人も愛した写真家」

会場校：見附市立見附中学校

公開：1学級

授業者：3年 白井 拓己

指導者：上越教育大学教職大学院 教授 早川 裕隆 様
中越教育事務所 指導主事 丸山 俊 様



研究推進責任者
見附市立南中学校
川上 綾子



教科・領域担当者
見附市立見附中学校
早田 浩延

こんな深い学びの姿を目指します

価値観が多様に広がっていく社会の中で、「自分ならどうするか」という主体的な観点から道徳的価値と向き合い、他者の意見に触れることや「対話」を通して、自分にとっての新たな気付きや視野の広がりを得て、「多面的・多角的」に自分自身と道徳的価値の関わりについて捉え直したり、練り直したりしながら、自分はどうかを問い続ける生徒の姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.8)

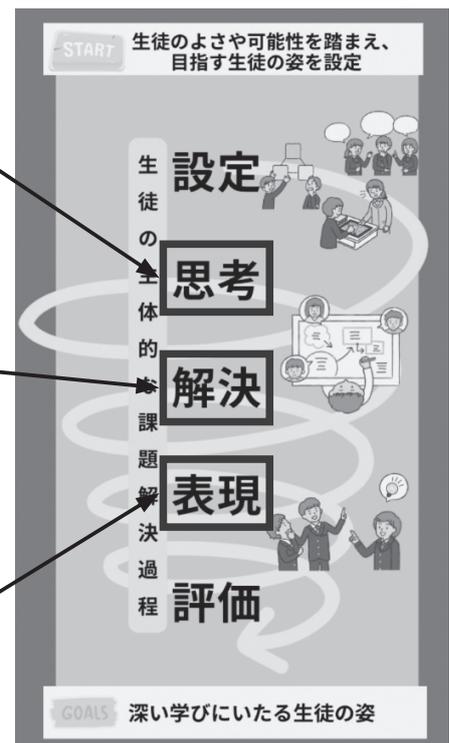
比較や視点の転換を意図した発問や資料で、多面的・多角的な思考を促します。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.10)

対話が深まるよう、「ICTでの意見の可視化」や「問い返し」を工夫します。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.15)

学習した内容を個に戻し、それぞれの納得解について考える時間を十分にもち、自分で語れるようにします。



見附市の研究の取組

道徳科の授業は、生徒の実態を把握したうえで、指導要領に示されている「内容項目の概要」と「指導の要点」を参考に、指導のねらいを立てて行われるものです。

本研究では、この「ねらいづくり」に重点を置き、市全体で研修を行いました。

研究推進委員が作成した単元構想シートを用いて、授業者が教材に描かれている道徳的価値への理解を深めます。これは、授業者がファシリテーターとして話し合いをコーディネートするための大切な準備です。

<p>単元構想シート</p> <p>教科名 わたしのせいじゃない</p> <p>価値項目 C-11 公正、公平、社会正義</p> <p>指導要領解説で大切にしたいキーワード</p> <ul style="list-style-type: none"> ・痛ったものの見方や考え方を避けるように努め、差別や偏見のない社会にしたいという思いをもつ ・多額の意見に同調したり、傍観したりする自分の弱さに向き合う ・「正義を信んじ」＝正しいと信じることを自ら積極的に実践できるように努める ・「公正さを信んじ」＝私心にとらわれて事実をゆがめることを避けるように努める 	<p>授業展開・流れ</p> <p>【テーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・差別や偏見のない社会を実現するために何が大切だろうか。 <p>【資料提示】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いじめ」がなぜ生まれたか考える。 ・〇1人1人の何が違ったのか考え、共有する。(スライド共有) ・「被害者」「加害者」+「傍観者」=この中で止めることができるのは誰。 <p>◎中心発問</p> <p>あなたはこのクラスの一員として、泣いている子を守るためにどんなことができますか。</p> <p>＜多面的・多角的に自己の考えを練り上げるための手立＞</p> <p>グループで意見交流をしてホワイトボードに整理させることで、自分たちができることについて、多面的・多角的に考えることができるようにする。</p> <p>＜振り返りの視点と自分ごとにするために＞</p> <p>仲間の意見を聞いて考えたことや、感じたこと、自分を振り返り、テーマについて書きましよう。</p> <p>＜多面的・多角的に自己の考えを練り上げるための手立＞</p> <p>全体で発表させることで、弱さを持っているのは自分だけではないと気付かせたり、差別や偏見のない社会の実現のための行動に繋がる思いを促させたりする。少しいの意見を共有し、積極的に実践できる態度につなげる。</p>
<p>主題名 差別や偏見のない社会の実現のためにできること</p> <p>本時のねらい</p> <p>① 子どもの評価する活動</p> <p>② 考える内容・知覚・価値理解</p> <p>③ 育てたい価値</p> <p>④ 育てたい価値の一端</p>	<p>8人の言動について聞いて、いじめを見過したり、関わろうとしないかたりする人物の心情の中にある弱さや、不公平がなぜ生じるのか考える活動を通し、</p> <p>なぜそれが許されないことなのか、育て見ゆらむをせず、積極的に差別や偏見をなくすための努力をする意識を定着し、</p> <p>自分の仲の弱さを克服して、いじめを許さず行動しようという</p> <p>実践意欲を育てる</p>

見附市で作成した単元構想シート

研究会

本時のテーマは「自然との共生」です。松岡さんは『サルのため』と言って駆除に協力します。松岡さんの葛藤や苦しみを理解しつつも、実際は動物の命を奪っていることに矛盾を感じ、「自然との共生」とは人間の側の都合のいい言葉なのではないかと憤りを感じる生徒もいると推察します。このような問題は、身近な場所でも起きています。



1年次公開授業の様子

正解のない予測困難な時代を生きる生徒たちが、この課題を自分事として捉え、これからの自分の在り方を模索する契機となる「多面的・多角的に自己の考えを練り上げる」道徳科授業を目指します。



意見を交流し合う場面

教材本文を補足するような資料や異なる視点から考える材料となるような資料の提示、それらを生かした話し合いを通して、道徳的価値について多面的・多角的に思考する姿を目指します。

ポイント1

難しいと感じる選択や、道徳的価値観が対立するような内容を問うことで、生徒が「考えてみたい」「他の人の意見を聞いてみたい」と思う場面を作ります。

ICTを活用して意見を可視化することで、共感できる部分やそうでない部分、根拠の違い等が明確になり、生徒が自分の考えを捉え直したり、練り直したりすることができるようになります。このような対話を通して、道徳的価値への理解が深まることが期待されます。



可視化した意見を元に問い返す場面

ポイント2

課題となっている道徳的価値について、1時間の授業を通して繰り返し考えるよう促します。これにより、課題を教材文の中の出来事として終わらせず、自分事として考え続ける姿を目指します。

ポイント3

道徳 <新潟地区／新潟市中教研>

11月14日(木) 研究会開催

研究主題：豊かなかかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成

題材名：「2年：むこう岸には」
「3年：希望の義足」

会場校：新潟市立黒埼中学校

公開：2学級

授業者：堀口 健一・上野 由貴

指導者：新潟市立総合教育センター

指導主事 佐久間 奈々子様



研究推進責任者
新潟市立亀田西中学校
岡澤 唯子



教科・領域担当者
新潟市立黒埼中学校
河治 正人

こんな深い学びの姿を目指します

1時間目は他者との対話です。様々な意見を出し合い、共有する過程で、題材への理解を深め、そこから最適解を考える姿を目指します。

2時間目は他者や自己との対話です。前時の最適解に対して再検討を行う過程で、それまで気づけなかった自己に気づき、自分はどうするかと考える姿、また、その気づきを踏まえて納得解を考える姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.1)

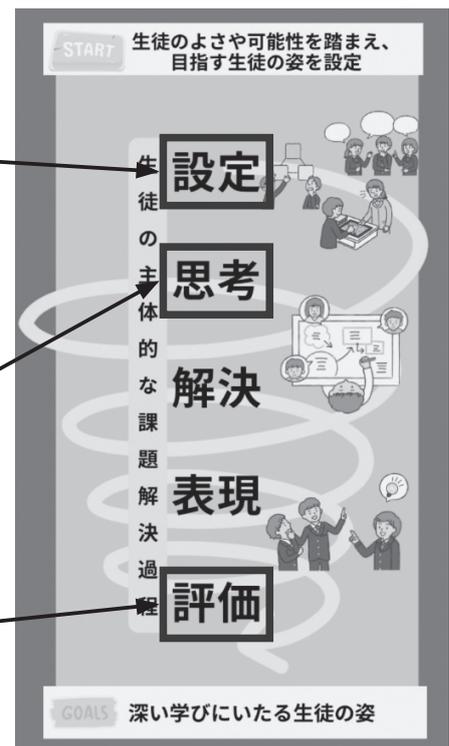
他教科で学んだ知識を想起させながら題材について考えられるようにする。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.8)

様々な意見を引き出すために、話し合いの方法や意見を共有する方法、発問を工夫する。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.19)

振り返りの「揺さぶりをかける発問」で、自己を深く見つめられるようにする。



単元(題材)の様子

題材への理解が深まるように、他教科でこれまで学習した内容を想起させながら進めます。

3学年「希望の義足」は、現実起きた問題が取り上げられている題材であるため、主に社会科で関連する内容を学習します。2学年「向こう岸では」は、抽象化された話です。主に国語科の関連学習(「思考の視覚化」「具体と抽象」)や1年時の「異文化の人々と共に生きる」を役立て、学習課題に入りやすくします。

ポイント1

少人数での対話場面を設定し、様々な意見を引き出します。引き続きそれを可視化し、全体共有しながら、問いを立てていきます。

これにより、題材への理解が深まり、学習課題に対して多面的・多角的にとらえながら思考することが可能になります。さらに問いを投げかけながら、個々の最適解へと導きます。

ポイント2



前時にまとめた最適解に対し、揺さぶりをかけるための問いを仕掛け、自己との対話へと導きます。生徒は他者の発言を聞きながら、自分はどうかと考え始めます。そのうえで、納得解へと導く問いを投げかけます。

これにより、生徒は自己との対話を通して、投げかけられた課題を自分事として捉え、自分の言葉で納得解を導き出していきます。

ポイント3



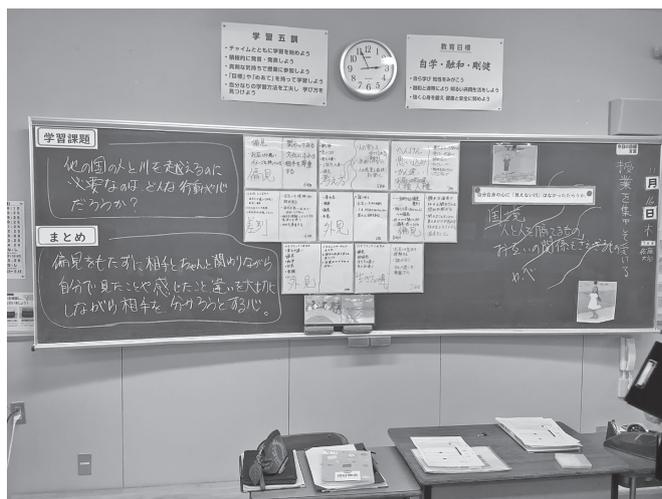
研究会

最適解を導く1時間目を経て、納得解を導くまでの2時間目を公開します。

校内研修で継続的に取り組んできた手立ての工夫「他教科で学んだ知識や過去の学びを生かす」「話し合い場面の方法や発問の工夫」「振り返りの発問の工夫」によって、生徒が新たな気づきを得て自己との対話を深め、これからの自分の生き方を見つめる姿を目指して準備しています。

国際理解・国際貢献という、生徒が自分事として関わるのが難しいテーマに取り組む際のヒントにもなればと考えます。

ポイント1・2・3



道徳 <下越地区／村上市・岩船郡中教研>

11月15日(金) 研究会開催

研究主題：多面的・多角的な視点をもって自己の生き方を見つめ、深い学びに向かう生徒の育成

題材名：「3年：人間の命とは」
～人間の命の尊さ・大切さを考える～

会場校：村上市立朝日中学校

公開：1学級

授業者：3年 加納 貴文

指導者：下越教育事務所学校支援第2課

課長 白澤 道夫 様



研究推進責任者
村上市立山北中学校
相馬 亮



教科・領域担当者
村上市立朝日中学校
五十嵐 雅人

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が他者との対話を通して異なる考えに触れることで、多面的・多角的な視点をもって自己の生き方を見つめ、深い学びに向かう姿を目指します。

生徒が自分の最初の考えを思い付きに留まるだけでなく、他者対話・自己対話の往還を通して、生徒は自分の考えを変容させたり深化させたりしながら自分事として考える姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.3)

「自分事としての課題」にするための授業展開を設定する。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.7・8)

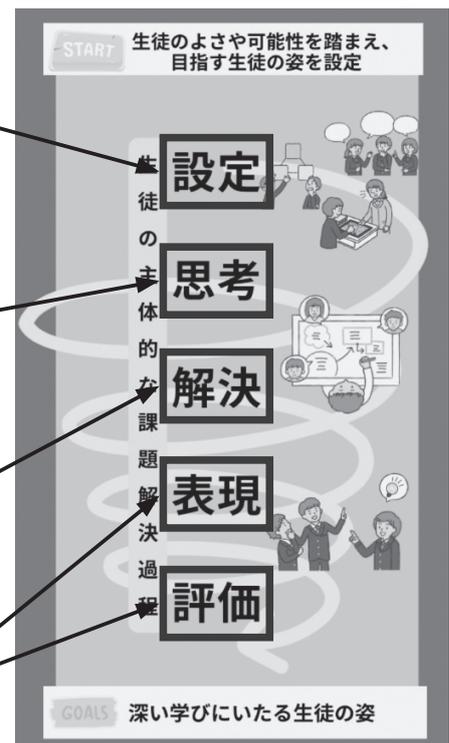
多面的・多角的な視点からの発問ができる場面を設定する。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.8・10)

他者対話・自己対話を設定する。

ポイント4 (「深い学びの技法」のNo.15・19)

自らの価値観を深める振り返りを行い、自己評価する。



単元(題材)の様子

① 資料を読み、登場人物の心情を捉えます。それぞれの思いや考えを整理します。心情メーターを使い、自分の立場を明らかにします。さらに赤と青の2色のコップを使い、他の生徒へも視覚的に自分の立場を表します。これにより、クラスの仲間はどのような心情にあるのか互いに把握できるようになります。

ポイント1



②～④ 多面的・多角的な視点から発問をします。医師や州の裁判所、患者の両親の立場から発せられる考えを客観的に捉え、重篤な昏睡状態である女性が、「何を望んでいるのか」、現時点での自分の考えをもちます。どの立場に共感できるか、心情メーターと2色のコップを使い自分の心情の変化に気付かせます。コップの使用で、自分だけでなく周りの生徒の心情の変化も捉えることができると考えられます。

ポイント2

○3つのキーワード

1 「問題解決」→問題意識をもてたか

・「道徳的な価値」に関する問題に自己の価値観をもとに気付くこと

2 「自分事」→当事者意識をもてたか

3 「多面的・多角的」

- ・ねらいとする道徳的価値を様々な面を考えている。
- ・様々な登場人物の立場で考えている。
- ・自分と他者の考えを比べて考えている。
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考えている。
- ・人間の強さや弱さなどを捉えて考えている。

⑤ 重篤な昏睡状態の女性を「自分の家族や大切な人」だと想定した、他者対話・自己対話の往還を通して、医師や裁判所、両親の立場に立ち、話し合いで対立意見をぶつけ合います。他者対話・自己対話をすることで考えが深化し、話し合いの中で心情の変化が起こることが予想されます。

ポイント3



○自らの価値観を深める振り返りを行います。更なる自己対話で考えを深め、生命の尊さについて「自分事」として考える力が育成されます。

ポイント4

研究会

⑥ 研究会のねらいは「多面的・多角的な視点」で、「自分事として」自己の生き方を見つめる」生徒の姿です。

様々な立場の考えに触れながら、生命の尊さについて考える授業を予定しています。

ポイント1・2・3・4



⑦ 生徒は自分の考えを最初の思い付きに留めるのではなく、他者との対話を通して異なる考え方に触れることで自分の考えを変容させたり、深化させたりしてきました。最終的に生命の尊さについて「自分事」として考えます。